今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

現状に甘んじることなく 常に上を目指し、変化した

石川県立金沢泉丘高校 森 博之

豊かな歴史の中で受け継がれてきた価値観を見直し、取り組みに手を入れることは決して容易ではない。「余計なことをして、失敗したらどうする？」と皆が臆する中、「前例踏襲は退廃につながる」と誰かが声を上げた……。森博之先生が変革の時代を振り返る。

東京大合格者が3倍に

石川県立金沢泉丘高校に赴任したのは、2001年度、教師になって14年目の時です。県内屈指の進学校でありながら、部活動もとても盛んな伝統校で、生徒たちは充実した高校生活を送っていました。

赴任4年目に初めて担任を外れ、進路指導課専任になりました。当時、金沢泉丘高校の生徒の主な志望先は京都大、大阪大、そして金沢大で、東京大などの関東の大学に関心を示す生徒、保護者は決して多くはありませんでした。その頃、同校はいち早く学校経営計画を立案し、「確かな学力を身に付けた、次世代リーダーの育成」を目標に掲げていました。そしてその実現のためには、東京大を含めた広い視野で志望校を考えることが必要だと、進路指導課長の菱田浩章先生は考えておられました。

「地元にこだわることなく、よりその生徒に合った、より高い目標に向かわせたい」と進路指導課や各学年団に発信する菱田先生と仕事をするうちに、私も「希望を受け入れるだけの指導は進路指導とは言えない」「生徒が気付いていない観点で進路を示し、深く考えさせるべきだ」と思うようになりました。そして思い付いたのが「東京大入試説明会」です。「高い目標を目指す仲間がたくさんいること、そして、教師が一丸となって支えようとしていることを目に見える形で示したい」と菱田先生に企画の意図を説明しました。

もともと私は、従来の取り組みを刷新したり、新しい企画を立ち上げたりすることが好きでした。とはいえ、金沢泉丘高校のような学校で、しかも30代後半の私が学校の進路実績に大きくかかわるような企画を運営することが出来るのか、そもそも生徒は集まるのか……。しかし、そんな私の不安も、菱田先生の「それ、面白そうだねえ！」というひと言で解消されました。

それから数か月間、進路指導課を挙げて、生徒に声を掛けると共に、各教科に添削指導の協力をお願いし、「東京大入試説明会」の準備と入試本番までの体制づくりを進めました。そして迎えた説明会には、30人以上の生徒が参加。生徒たちは「仲間がたくさんいることに驚いた」「みんなに負けないように頑張りたい」と感想を口にしました。

結果、例年5、6人の東京大合格者が、その学年では20人と3倍を超え、京都大合格者も増加しました。学校全体の志望の底上げが実現したのです。

常にあとひと工夫を考える

菱田先生は、私を始め進路指導課のスタッフと常に議論しながら、進路指導のあり方を改善されていきました。菱田先生が「前例踏襲」を嫌いなことは森先生が金沢泉丘高校の進路指導課に配属になった年度の3年生は、同校が様々な学校改革に取り組み始めた最初の学年でした。意識の変革は、生徒はもちろん、教師にも求められていました。例えば、「最近の生徒は基礎学力が身に付いていない」「当たり前のことが出来ない」と嘆くことを、私たち教師がやめようというのもその1つでした。事実を受け止めて、やるべきことを考える教師集団になりたかったのです。

進学実績の面でも、生徒たちは確かに志望校に合格してはいましたが、果たしてこのままでよいのか、それぞれが1段階ずつ、高い目標を目指すよう、生徒を刺激してみよ

先輩教師の言葉

進路指導に「失敗」があるならそれは形骸化だ

石川県立金沢伏見高校　校長
菱田浩章

左 もり・ひろゆき　数学科。石川県立金沢辰巳丘高校、羽咋高校を経て、金沢泉丘高校へ。主幹教諭。教務主任。

右 ひしだ・ひろあき　地歴・公民科。石川県立小松高校、金沢泉丘高校などを経て、小松市立高校で校長を務める。その後、金沢伏見高校へ。校長。

撮影◎金沢伏見高校にて

分かっていましたから、生徒や保護者向けの説明会の企画を考えたり、会議資料を作ったりする時は常に工夫すべき点がないかを考えました。例えば、進路検討会用の資料では、それまで生徒本人の志望大と成績だけを一覧化していたところに、「担任が進学させたい大学」の欄を加えました。その改訂がベストだったのかは分かりませんが、少しでも生徒のためになりそうだと思ったら、迷わず実行する雰囲気が課内にはありました。

今思えば、菱田先生は「新しい挑戦」が好きな私の性格を、見抜いていたのでしょう。菱田先生の指示はいつも「ポイントはこれだけ！　あとは考えてね」といった感じで、私が工夫する余地を残してくださっていました。もちろんその分、いろいろな先生方に話を聞くなど、自ら学ぶことも必要でしたが、新しいものを創り出す充実感のため、仕事を負担に感じたことはありませんでした。

「新しいものをつくったり、何かを変えたりして、うまくいかなかったら……」と、特に若い先生が心配する気持ちも分かります。しかし、社会や生徒が絶えず変化する中で、かつて正しかったことが、今も正しいとは限りません。どうすればよいのか周囲の先輩に相談し、自分でも勉強していけば、きっと新しい挑戦は成功します。

金沢泉丘高校も若い先生が増えています。学校をもっと良くしようという情熱に期待したいですし、菱田先生のように私も「変化を恐れるな」と彼らに伝えていきたいと思っています。

うと考えました。だから森先生の「東京大入試説明会」はとても魅力的でした。生徒を褒めることも叱ることも上手な森先生なら、感受性豊かな生徒たちを最後まで導いてくれると期待していました。

私は進路指導には、こうすればうまくいくという正解はないけれど、一方で大きな失敗もないと思っています。たとえその場ですぐに効果が出なくても、中長期的に見れば、いつか生徒の心に火をともすかもしれないからです。ただし、失敗があるとしたら、それは前例踏襲になり、取り組みが形骸化することです。

その意味で、私が今反省しているのは、若い先生方に「古いものの壊し方」をもっと教えるべきだったということです。森先生たちは新しい挑戦、工夫を続けてくれましたが、勇気を持ってやめることで現状を打開する局面も、もっと彼らと一緒に経験できればよかったと思います。歴史はあるが形骸化してしまったことをやめるのは、魅力的な新しいことを始めるのと同じくらい大切で、大変なことですから。森先生なら、若い先生のエネルギーを引き出して、それが出来ると信じています。